

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙 第 号	論文提出者名	川名 剛之
論文審査 委員氏名	主査 前田 初彦 副査 木本 統 夏目 長門		
論文題名	ベトナム社会主義共和国への口腔ケア技術移 転に関する研究—2021 年介入前と 2023 年介 入後の比較—		

インターネットの利用による公表用

(論文審査の要旨)

No.1.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

ベトナム社会主義共和国（以下ベトナム）では、歯科、特に口腔ケアによる予防歯科の分野は遅れている。また、日本で行われているような学校歯科検診のシステムの導入などの取り組みはなされていない。

申請者は、ベトナム国民の口腔疾患の罹患予防を確立することを目的に上位、中位、下位 3 つの目標を設定した。上位目標はベトナムに対する小学校歯科検診システムの技術移転によって、ベトナム国民の口腔疾患の罹患率を低下させることである。中位目標は、全国から入学してくる国立チャビン大学歯学部学生が毎年参加して小学校歯科検診のシステムを学び、卒業後に全国に広げて行く際の地域のリーダーとして、同システムを各地で定着させることである。短期の下位目標は以下の 3 つを設定した。チャビン大学歯学部の学生への小学校歯科検診システムの技術移転により、効果として児童の歯垢付着率と齲蝕罹患率を低下させ、歯科医院への受診率を向上させる。児童等の口腔ケアに対する意識変化、行動変化を改善する。チャビン大学歯学部の学生は、学校歯科検診の有用性を体験することで、将来の勤務する地域で歯科検診を行う重要性を理解する。本研究は下位目標についての研究であった。

ベトナム国内で一般的な水準の省であるチャビン省を研究フィールドとし、全国から学生が入学する国立チャビン大学歯学部学生を研究協力者とした。対象は、チャビン省の省都であるチャビン市の全ての小学校の児童である。歯学部学生が歯科検診と口腔ケア指導を行い、教員である歯科医

(論文審査の要旨)

No. 2

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

師がサポートを行なった。学校歯科検診の調査項目は歯垢付着の状態、乳歯・永久歯の状態、小学生へのアンケートから構成されている。学校歯科検診と口腔ケア指導に先立ち、日本人歯科医師を派遣し診査方法、記入方法、指導方法について講義・実習を行なっていた。実習後はフィードバックを行い、正確な診査が行えるようにした。2021年に実施した学校歯科検診を介入前のコントロールとし、2回の口腔ケア指導を実施した後に、2023年に実施した学校歯科検診を介入後として比較を行なっていた。2023年の学校歯科検診の後には、小学生保護者と歯学部学生に対しアンケート調査を行なっていた。

歯垢付着の状態については介入後で有意に多くなっていた。これは介入前の歯科検診時に検診環境が暗いという意見があったため、介入後の歯科検診時にライトを支給したことで、歯垢付着の状態が正確に判断できたことが要因と考えていた。口腔ケア指導の効果をより正確にするためには来年以降に同じ環境下で比較する必要があると考えられた。

齲蝕の罹患率は介入前 92.3%から介入後 90.7%に減少していた。齲蝕罹患率は処置完了者率と未処置者率の合計から算出され、介入後は処置完了者率が増加し未処置者率が有意に減少していた。数値変化としては小さいが、歯学部学生による口腔ケア指導でも齲蝕罹患率を下げることは可能であることが明らかとなった。

歯科医師が怖いと思う児童の割合は、介入前 35.8%に対し介入後 26.4%

と減少していた。歯学部学生との口腔ケア指導を通じて児童が親近感を持ったためと考えられた。歯科医師に対する恐怖心の減少は、歯科医院への受診し易さに寄与し受診率の向上が期待される。

歯科医院の受診経験の割合が介入後に小学2年生から5年生で増加していた。保護者へのアンケートでは、回答した75.2%が検診結果の通知を受けて児童に歯科医院を受診させていた。口腔ケア指導のみならず、検診結果の通知が保護者の歯科医院へ連れて行く大きな動機になっていたと示唆していた。保護者への検診結果のフィードバックを充実することで、歯科医院への受診をさらに促せる可能性がある。

本プロジェクトの意義・学習効果にアンケートに回答した95%以上の歯学部学生が評価していた。この活動を通じてベトナムの歯学部学生の口腔ケアや学校歯科検診への意識の向上が見込めることが示されていた。未だ治療が中心で、公衆歯科衛生の概念が低いベトナムにおいて、将来自分の出身地でこの経験をもとに実践する意識改善につながることで、ベトナムの公衆歯科衛生の向上に貢献できると考えられた。

本研究は、歯学部学生への小学校歯科検診システムの技術移転により、児童の齲蝕罹患率を低下させ、歯科医院への受診率を向上させることが可能であることを実証した。また、児童等の口腔ケアに対する意識変化、行動変化を改善できることを示すことができた。チャビン大学歯学部の学生は、学校歯科検診の有用性を体験し重要性を理解することで、将来のベト

(論文審査の要旨)

No.4.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

ナムの公衆歯科衛生の向上に貢献できる可能性があることが示唆された。

以上より、本研究では、口腔病理学、歯科補綴科学、口腔外科学ならびに関連諸学科にも寄与することは大きい。よって本論文は、博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。